

目的(Goal)

新しい工学理論・概念の芽を発見し，応用を推進することで
その概念を創り上げていくための活動を行う

Discovery and application of new engineering theory and concept

方法(Approach)

- ・生体の制御・情報処理機構に着目したシステム工学的アプローチ
- ・生体機能発現メカニズムを支える原理を数理的に追及する研究

Researches to uncover principles of emergent mechanisms of biological functions

方針(Strategy)

- ・生体，生理システムに関する横断的なテーマを柔軟に設定
- ・テーマに関して組織化された演題を募集
- ・30分程度の時間をかけてまとまった議論のできる場を提供

Offering a forum for active and in-depth discussions in the annual symposium

活動計画(Activity Plan)

- ・毎年秋に，生体生理工学シンポジウムを開催
- ・もともと分野を特定せずに会を運営しているので，他部門との連携にも積極的

The annual symposium on biological and physiological engineering is held in autumn.

- 1) 生体生理工学シンポジウム(主催) 毎年秋 (1986～)
- 2) 生体医工学シンポジウム(共催) 毎年秋 (2003～)
- 3) 生体医工学サマースクール(協賛) 毎年夏 (2002～)

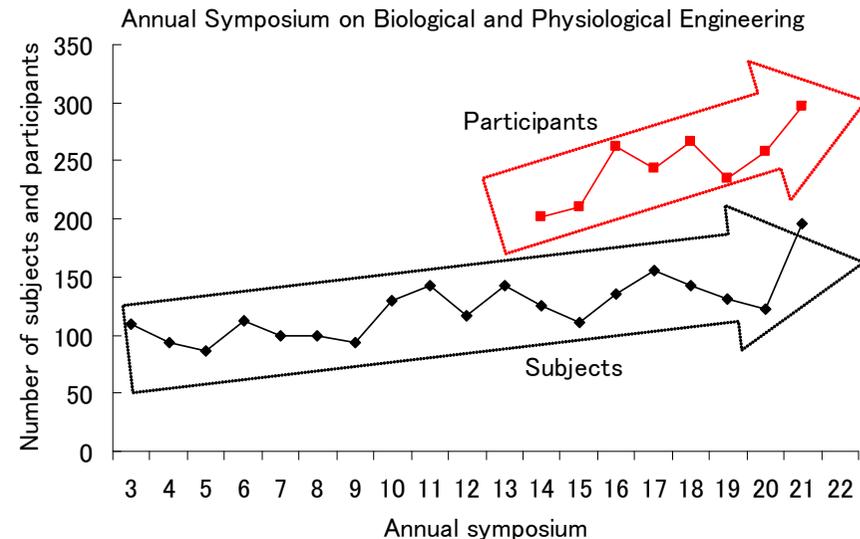
主査：岡 久雄 (岡山大学)
(hoka@md.okayama-u.ac.jp)

メンバー：顧問12名，運営委員36名，幹事3名

これまでの活動の推移

演題数(Number of subject): 過去20回以上のシンポジウムの開催により，初期は100件程度の演題であったものがここ数年では150～200演題に上る講演が行われている

参加者数(Number of participants): ここ数年，250～300名の参加を得て，活発な議論が行われている



横断的なオーガナイズドセッション例

- ・生体生理工学の福祉・健康分野への応用
- ・ニューロエンジニアリング
- ・生体信号計測技術の新しい分野への応用
- ・無侵襲脳機能計測と解析
- ・フィジオーーム：階層間を横断するモデル化はできるか？